フィリピンの都市スラムの貧困について

北山 朋実、里見 悠衣、鹿野 蒼一朗、下原 雄祐、
東野 倖拓、西河 里梨、原 裕一朗、青山 夕祐

はじめに

国際学部グローバルスタディーズ学科斎藤ゼミでは、国際問題の一つである貧困について学んでいる。この度、斎藤ゼミ3年生は2021年10月21日にNPO法人アクセスの方々のアレンジにより、フィリピンへのオンラインスタディーツアーを行った。

NPO法人アクセスは、フィリピンにおいて、「子どもに教育、女性に仕事」を届ける活動を行っている。このオンライン研修会には、アクセスの野田さんをはじめとする現地のフィリピンの方達4名に加えて、3年ゼミ生11人と斎藤教授が参加した。スラム街ヘルピング地区へのヴァーチャルでの訪問や、現地の方のライフ・ストーリーからいろいろと学んだ。本報告書では、これらをふまえ、途上国や貧困地域への支援の在り方や国際問題の一つである貧困問題についても考察をおこなう。

1. フィリピンの概要

フィリピンは東南アジアの東側に位置し、太平洋に浮かぶ7,109の島からなり、面積は日本の約8割にあたる大きさ（299,404平方キロメートル）の島国である。14世紀頃に誕生したスールー王国から、スペインによる統治、米西戦争によるアメリカの支配下への移行、日本による軍政を経て1946年に共和国として独立したが、第二次世界大戦後、他のアジア諸国と比較して経済や産業の成長が芳しくなかったため「アジアの病人」と呼ばれていた。2010年のアキノ前大統領就任以降、自由主義的経済政策を基にしてフィリピン経済は急成長したが、その急成長とは裏腹に低所得者層の課題は一向に改善されなかった。そのため、経済成長に取り残された貧困層から支持された現在のドゥテルテ大統領が2016年に就任した。以降、貧困率は減少傾向にあるものの、依然として貧困問題は存在している。

2. ヴァーチャル・スラム訪問

今回のオンラインでのスラム訪問においては、事前にフィリピン現地のスタッフの方が撮影してくださったトンド地区のリアルな様子を視聴した。映像とともに野田さんの説明が加えられ、私たちはトンド地区の街の様子や人々の暮らしへの理解を深めることができた。

図1　スラムへの入り口付近

ここでは主にトンド地区の街の様子、ゴミの投棄場「スモーキーマウンテン」、ならびに小売店「サリサリストア」について取り上げたい。トンド地区はフィリピンの首都マニラの北西部に位置する「東南アジア最大のスラム街」と言われている。住宅地には耐久性に欠けた簡素な家が密集し、いかにもスラム街という印象を受けた。足元は整備されていない砂利道で、水はけが悪くぬかるんでいるようだった。大雨が降ると街の一部分が浸水し、そこを通らないと家に帰れないという状況も少なくないという。また道端にはゴミが散乱し、いたるところにゴミ山ができており、画面からは直接は伝わらなかっ

たものの、街の悪臭が想像できた。トンド地区の住人の多くが「ゴミ拾い」をして生計を立てているというが、その生活は厳しいようだ。このような映像の中の暮らしは我々の日常とあまりにもかけ離れており、正直ショックを受けた。そんな中、カメラを向けると笑顔を見せたり、路上で楽しそうに遊ぶ子ども達の姿が最も目に焼き付いた。決して楽な生活をしているわけではないが、とてもかわいそうだとは思わなかった。彼らや彼女らの笑顔を見ていると「幸せ」とは何かと考えさせられた。（お話のなかではスラム街の名前にわざと綺麗な名前やいい匂いの名前をつけている街もあるそうだ。）

図 2　家の前での洗濯の様子

図 3　食事を準備している様子

スモーキーマウンテンはスラム街にかつて存在したゴミ山の名前であり、積もり積もったゴミの山が自然発火したときに出る煙からそう名付けられた。スモーキーマウンテンに比較的近いこのスラム街では、私たちの事前の予想とは大きく違い、結構な貧富の差があるようだった。その日暮らしでダンボールを集めて生活している人もいれば、学校に行けている人もいる。ただ電気が通っていたり、サリサリストアのような売店もあったりして、私たちがテレビ番組などで見る悲惨なスラム街とは少し違い一つの街として独特の形態を作っているのだと感じた。

図 4　ゴミで生計を立てる人々

また、フィリピン独特の小売店サリサリストアも印象的だった。フィリピンでは都市部でも地方でもこのサリサリストアはあるそうで、トンド地区でも実際にお店の様子が伺えた。日本でいうコンビニのようなお店で、お菓子やジュース、調味料、洗剤などの日用品など様々な商品が陳列していた。お店の窓口は鉄格子がはめられており、客が店内に入られない仕様になっていた。これは犯罪が多発するスラム街特有の万引きを警戒した防犯対策であろう。さらに特徴的だったのは商品が小分けされているという点だ。例えば、洗剤は 1 回分の量で売られており、お菓子も小袋でバラ売りされているようだった。このような販売方法にも地域ならではの理由がある。トンド地区は当然ながら低所得者が多く、日給や週給で得たお金で目先の生活に必要なものを必要な分だけ購入するのが主流である。つまり、映像にあったサリサリストアはトンド地区住民のニーズ故に小分け販売という手段を取っているのだろう。

図 5　排水されず水につかっている街

このように途上国の都市スラムの貧困はすさまじい。サリサリストアのような小売店を営んでいる人でさえその日暮らしであることに変わりはない。この地域の人々は各々のニーズに合わせてサリサリス

トアなどを展開しているが、同じスラムの中でも少なからず貧富の差も感じられた。映像に映る人々の表情は明らかに不幸せを感じているような表情でもなく、きっと一日を生きることに必死だからこそ、あのような表情を見せたのかと思うと、非常に心が痛んだ。トンド地区に限ったことではないがスラム街を見ると自分がどれだけ恵まれた環境に居るかが実感できる。それと同時にこのような貧困に苦しむ人たちについて考え、また必要とされる支援の重要性をも感じることができた。人々には知識と技術が必要なのだと感じた。

3. アンドレアさんのライフ・ストーリー

続いて、フィリピンのスラム街を生きてきた女性である、アンドレアさんの人生について、アンドレアさん本人からお話を聞いた。アンドレアさんは、私たちには想像しがたいような壮絶な人生を経験している。その経験を本人から聞けるのは貴重な機会であった。

以下は、アンドレアさんの人生の記録だ。アンドレアさんは、ブラカン州に生まれた。姉と兄がいる普通の家族であった。アンドレアさんは8歳の時に、トンド地区のNGOの活動によって教育を受けることができた。しかし、彼女の父や兄が、アルコールやドラックに依存するようになり、家族が壊れていった。母だけがしっかりしていたため、彼女は学校を続けることができていたが、やがてお金が無くなり、学校を中退して働くことになった。彼女は、この頃に教会に通っていたおかげで非行に走らなかった。そして初恋の相手と結婚し、娘が生まれた。その後、彼女はコールセンターで働いた。その時、母の糖尿病が悪化し、亡くなってしまった。ずっと心の支えだった母が亡くなったので、彼女はかなりショックを受けた。さらに、その頃にはもう既に夫との関係が悪くなっていた。それでも彼女は、自分の娘のことを考えて、がんばって自分を奮い立たせていた。

2018年になって、彼女のもとにNGOによる職業訓練の誘いがきた。彼女は、最初は娘の面倒を見るために断っていた。しかし、姉が娘を預かってくれることになった。彼女はこれをチャンスだと思い、職業訓練を受けることにした。その後、彼女は努力して簿記の国家資格を取り、保険会社に就職した。保険会社での契約期間が終わって次の就職先を探している時に、新型コロナウイルスが流行し始めた。これにより、彼女は1年間無職になってしまった。お金も無くなり、生活が困窮していった。この頃は非常に辛かった。

しかし、そんな彼女にも希望となるものがあった。父や兄姉達が教会に通い始めたのだ。彼女は2016年から2019年までの間、若い年齢で妊娠をしたのが批判されると思い、教会に通うことをやめていた。だが、このことがきっかけで彼女も再び教会に通い始めた。家族がお互いに支え合えるようになっていった。教会に再び通い始めてしばらくして、彼女は牧師からオンライン教室の先生にならないかと誘いを受けた。彼女はそれをチャンスだと思い引き受けた。彼女にとって仕事は、娘のために収入を稼ぐ手段というだけでなく、生きる意味を与えてくれるものだとおっしゃっていた。スラム地区の多くの住民はこの生きる意味を実感できずに、早くから人生をあきらめている人が多いという。そのうえで、NGOは彼女たちにとってとても大きな存在であったということだ。

このように、アンドレアさんの人生は私たちの想像をこえるものであった。アンドレアさんは生きることに疲れ、死にたいと思ったときに、自分を最も支えてくれたのは母や娘、家族の存在であったとおっしゃっていた。彼女は自分が苦しい時にはいつも母がそばにいて、また娘の顔を見ることで、生きる勇気をもらっていた。そこから、生きていく上ではいかに、周りの人の存在が重要か、今の自分は周りの人の支えがあって生活できているのだということを改めて痛感した。また、彼女は他国からの資金援助や支援にも大きな恩恵を受けたとおっしゃっていた。そこで、私たち他国の人たちの支援が実際に多くの人たちを救っているということを再認識することができた。今回のように異なる国、境遇の方から直接、話を聞くことはとても価値のあることであると感じたし、アンドレアさんのライフストーリーを通じて貧困に関する実地の理解を深めることができた。

まとめ

今回のフィリピンへのスタディーツアーを振り返り、重要と思われることをまとめておく。

まず、他国から支援するにあたり、現状理解が必要であることである。スラム街ヘルピング地区の動画を視聴して、劣悪すぎる環境であることに私たちはショックを受けた。人々が住む家の密集度合い、洗濯や料理という家事を屋外で行っていること、買い物において今すぐ使用する容量分を買うための金銭しかないという事実が見られた。大量の雨が降った際には水捌けが悪いためその地区が浸水し、家までの帰路を防がれてしまうことも起こっていた。これらの劣悪な環境を理解しないことには、この地区への適切な支援はできない。動画を視聴しただけでは全体を理解することは難しいが、少しずつ理解を深めていくことが大切であろう。その上で、私たちが周りの人々へも情報発信し、より多くの人がこのような現状を理解できれば、よりその地域の人のためになる支援ができると考える。

また、アンドレアさんという女性から話を聞いた中で、他国からの支援がありがたいと感じる反面、自国政府からの支援が何もないことへの怒りが生まれる、という言葉があった。確かに支援することは間違いではない。しかし、支援対象国の体制が変わらなければ、その国は自立することが不可能ではないだろうか。フィリピンでは幼稚園から大学まで公立学校なら学費は無償であるが、制服や文房具、教材などの費用は自己負担であるため、学校へ行くことを断念する子供たちが多い。学用品費を削減し、子供たちには限りなく無償で教育を提供できるようなシステムを作らないと不就学の子供が増え続けるのではないだろうか。他国に私たち部外者が介入すること自体難しいが、目先の支援をしているだけでは根本的問題は改善されないであろう。

このオンラインスタディーツアーを通してフィリピンのスラム街がいかに劣悪環境であるかということに気づくことができ、アンドレアさんから実際の声を聴くことができたことで、他国の問題への関心理解が深まった。この関心を深めていき貧困問題について考え続けていく必要があると感じた。

参考文献

NPO 法人アクセス 2021「フィリピン・オンラインツアー」当日配布資料。

謝辞

今回のオンラインでのスタディーツアー実施にあたってはここに記載された方々の多大なご協力を頂きました。ここにお礼申し上げます。